

これからの博物館への期待

秋山信彦

(東海大学海洋学部・海洋科学博物館)

博物館の役割の中で重要な物として、自然史資料の収集及び保存はもとより、それらの資料を教育、研究に活用することです。これらの活動に関して、自然史博物館ネットワークの専門家がふじのくに地球環境史ミュージアムに協力する事で、より魅力的な博物館になってきたと思っております。

しかし、これだけではなく、これからの博物館の役割の一つとして、標本となった生物を保存、記録するだけでなく、生きた状態で生物群を保存してゆくことも必要と思っております。静岡県西部ではギフチョウの生息環境を保全することで生物群を保全しています。このような試みは各地で行われていますが、その多くが単に採集禁止とするだけで、環境悪化によって生物が絶滅している例が見られます。闇雲に採集することで生物の現存量を減らしてしまう恐れはありますが、通常、繁殖力の旺盛な生物では多少採集されても環境が良好であれば絶滅する様なことはありません。海のカタクチイワシは餌がプランクトンであることや、繁殖サイクルが1年以下であることから、繁殖力が大変旺盛です。そのためシラスとして仔魚期に大量に漁獲され、さらに親になると飼料原料とするために大量に漁獲されていますが、絶滅していません。反対にマグロのように魚を食べ、繁殖できるまでに最低4年もかかるような生き物の場合には大量に漁獲するとすぐに資源量が減少してしまいます。この様に生物は種類によって減少しやすい物とそうでないものがあります。そのような中で、繁殖力の強い魚類や昆虫などの生物では、直接的に採集されて絶滅するのではなく、その餌資源の減少や、繁殖や成長に関わる環境要因の悪化によって絶滅しています。そのために、絶滅危惧種を保全するための活動や普及啓発することは各地の博物館でも行われていますし、自然史博物館ネットワークでも行ってきています。

しかしながら、近年淡水魚や昆虫の中で人間からみた環境には大きな変化がないにもかかわらず、急激に数を減らしている種類がい

ます。これらの種類を保全するために各地で努力をしていますが、一向に数を増やさなかったり、絶滅してしまったりと成果が伴っていない例が多数あります。そのような中で生物の保全の一つの考え方として、生息域外保全と称し、万が一、本来の生息地でその生物が姿を消し個体群の絶滅に至ったとしても、一部を生息地域以外の場所に危険分散させておくことで種の絶滅を防ぐことができます。偶然の産物ですが、秋田の田沢湖で水質悪化によって絶滅したクニマスが、西湖に水産的な意味合いから放流されており、それが僅かに種として残っていました。決して良い例ではありませんが、人間の経済活動によって偶然種としての絶滅を逃れることができました。現在では遺伝的多様性を維持するためにおやみな放流を行わないようになってはいますが、生息域外での保全は今後重要な課題になってくることは間違いありません。一部の動物園や水族館では天然個体を採集するのでは無く、繁殖個体を展示に利用できるようにいくつかの園館が協力し合って遺伝的多様性を損なわないように繁殖させる努力を始めています。環境省と日本動物園水族館協会では協定を結び野生で絶滅の恐れのある種の一部を飼育施設で保全する事を始めています。現在、北アルプスのライチョウをいくつかの施設で生息域外保全をしています。博物館では大型の動物などの域外保全は困難であり、これらについては動物園や水族館に任せたいと思いますが、植物や水生生物など小型の生物であれば、生息域外保全活動も可能かと思えます。特に近年水田雑草や、水田周辺で生活していた魚類や昆虫などは農業の近代化に伴って数を減らしています。これらの動植物を自然史資料とした標本のみならず、生きた状態で保存することが必要かと思えます。勿論これは、博物館内に留まらず、広い静岡のフィールドも使っていく必要がありますし、県内の水族館や動物園などとの連携も重要だと思えます。今後のふじのくに地球環境史ミュージアムにこれらの活動の中心となることを期待します。